

森安彦教授略歷・主要著作目録

略 歴

一九三四年十二月八日

森忠左衛門・はつの五男として、東京府東京市世田谷区太子堂町一〇三番地（現在、東京都世田谷区太子堂三丁目二四番一号）に生まれる。

一、学 歴

一九四一年四月

東京府東京市太子堂国民学校入学（一九四七年三月卒業）

一九四七年四月

私立世田谷中学校入学（一九五〇年三月卒業）

一九五〇年四月

私立世田谷高等学校入学（一九五三年三月卒業）

一九五四年四月

東京教育大学文学部史学科日本史学専攻入学（一九五八年九月卒業）

一九五九年四月

東京教育大学大学院文学研究科修士課程日本史学専攻入学（一九六二年三月修了）

一九六二年四月

東京教育大学大学院文学研究科博士課程日本史学専攻入学（一九六六年三月単位修得退学）

一九七七年十二月

文学博士（東京教育大学）

二、職 歴

一九六六年四月

東京都立練馬高等学校教諭（一九七〇年五月退職）

一九七〇年六月

信州大学教育学部助教授

一九八一年一〇月 信州大学教育学部教授（一九八四年三月配置換）

一九八四年四月 国文学研究資料館史料館教授

一九九三年八月 国文学研究資料館史料館長（一九九八年三月退官）

一九八五年四月 併任 一橋大学商学部非常勤講師（一九八六年三月）

一九八七年四月 併任 一橋大学経済学部非常勤講師（一九八八年三月）

一九八八年四月 併任 信州大学人文学部非常勤講師（集中講義）（一九八九年三月）

一九八九年四月 併任 一橋大学法学部非常勤講師（一九九〇年三月）

一九九〇年四月 兼任 中央大学文学部非常勤講師（一九九一年三月）

一九九〇年四月 兼任 上智大学文学部・同大学院文学研究科非常勤講師（一九九四年三月）

一九九一年四月 併任 一橋大学社会学部非常勤講師（一九九二年三月）

三、学界ならびに社会における活動

一九六三年一二月 関東近世史研究会常任委員・評議員・会長（現在に至る）

一九九一年四月 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会理事（現在に至る）

一九九一年六月 日本歴史学協会委員（一九九七年五月）

一九九七年七月 日本歴史学協会国立公文書館特別委員会委員（現在に至る）

一九七四年七月 東京都武蔵野市文化財保護委員（現在に至る）

一九七七年四月 東京都世田谷区文化財保護審議会委員・会長（現在に至る）

- 一九八一年一〇月 財団法人信州農村開発史研究所所員（現在に至る）
- 一九八二年六月 東京都世田谷区立郷土資料館運営委員（現在に至る）
- 一九八四年一〇月 朝日カルチャーセンター立川「近世古文書を読む」講師（現在に至る）
- 一九八九年四月 日本放送協会学園生涯学習局「古文書講座」監修（現在に至る）
- 一九九一年四月 徳川林政史研究所参与（現在に至る）
- 一九九三年三月 長野県立歴史館協議委員（現在に至る）
- 一九九三年五月 世田谷女性史編纂委員会編纂委員（現在に至る）
- 一九九三年七月 東京都江戸東京博物館資料収集委員会委員（現在に至る）
- 一九九三年一〇月 東京都東大和市史編纂委員（現在に至る）
- 一九九五年十一月 東京都品川区文化財審議会委員（現在に至る）

主要著作目録

一、著書

『幕藩制国家の基礎構造——村落構造の展開と農民闘争——』吉川弘文館発行、一九八一年二月。

『旧信濃国善光寺平豪農大鈴木家文書』鈴木陽發行、吉川弘文館販売、一九八二年二月。

『世田谷女性史（中）——幕末期の太子堂村と妻たちの生涯——』東京都世田谷区教育委員会発行、一九八六年三月。

『大塩平八郎一件書留』（史料叢書9）国立史料館編、東京大学出版会発行、一九八七年三月。

『古文書への招待——江戸時代の村の庶民生活——』（NHK教育テレビ短期集中講座）日本放送協会編集、日本放送出版協会発行、一九九〇年十二月。

『古文書が語る近世村人の一生』（セミナー「原典を読む」④）国文学研究資料館編、平凡社発行、一九九四年八月。

『近世の村・家・人』（史料叢書1）国文学研究資料館史料館編、名著出版発行、一九九七年三月。

二、共編著

『武蔵国荏原郡太子堂村御用留』（慶応二年～明治一〇年全八冊 武相史料叢書5）武相史料刊行会編・発行、一九六四年八月～一九六六年七月。

『武州世直し一揆史料』（一）（二）、近世村落史研究会編、慶友社、一九七二年一月・一九七四年二月。

『幕藩体制Ⅰ・Ⅱ』（論集日本歴史7・8）大館右喜共編、有精堂、一九七三年三月・七月。

『世田谷区の歴史』（東京ふる里文庫20）荻野三七彦・他共編、名著出版、一九七九年八月。

『史料館収蔵史料総覧』国文学研究資料館史料館編、名著出版、一九九六年三月。

『村の世界 村の生活』（木村礎著作集Ⅳ）名著出版、一九九六年九月。

『幕藩制支配と地域動向』（村上直先生退官記念論集）吉原健一郎共編、文献出版、一九九六年一〇月。

『史料の調査と保存』（木村礎著作集Ⅹ）名著出版、一九九七年九月。

三、論文

『江戸近郊農村における三給支配の一実態——武州荏原郡太子堂村の場合——』『世田谷』一一号、世田谷区誌研究会編集・発行、一九五九年四月。

『関東における農村構造の変質と支配機構の改革——関東取締出役設置の歴史的意義——』（一）、『史潮』七四号、大塚史学会編・発行、一九六〇年十一月。

『幕藩制社会の動揺と農村支配の変貌——関東における化政期の取締改革を中心に——』『日本歴史論究』、東京教育大学昭史会編、二宮書店、一九六三年十一月。

『近世前期旗本の地方知行の動向——武蔵国における直参・山本氏の村落支配を中心に——』（上）（下）、『史潮』九八号・九十九号、一九六七年二月・六月。

『近世前期における旗本と農民』『近世郷土史研究法』（郷土史研究講座4）古島敏雄・他編、朝倉書店、一九七〇年六月。

『幕末期の幕政』『幕末郷土史研究法』（郷土史研究講座5）古島敏雄・他編、朝倉書店、一九七〇年六月。

「一六世紀末関東における在地土豪の一動向―武威国荏原・多摩両郡を中心に―」『社会文化史学』六号、社会文化史学会編・発行、一九七〇年八月。

「明治初年、東京周辺における農民闘争―品川県社会騒動を中心に―」『村方騒動と世直し―世直し状況の研究―』上（歴史学研究叢書）、佐々木潤之介編、青木書店、一九七二年三月。

「武州世直し一揆」の基礎的考察―主体勢力の分析を中心に―『信濃』一〇九号、信濃史学会編・発行、一九七二年一〇月。

「武州世直し一揆」の展開過程―「世直し」一揆の行動と論理―『近世封建支配と民衆社会』（和歌森太郎先生還暦記念、弘文堂、一九七五年十一月）。

「飢饉と一揆」『歴史公論』二卷八号、雄山閣、一九七六年八月。

「佐渡天保一國騒動の展開と特質」『佐渡―島社会の形成と文化』、地方史研究協議会編、雄山閣、一九七七年五月。

「江戸周辺における「世直し状況」と農村支配政策―彦根藩世田谷領を中心に―」『近世史叢』二号、近世村落史研究会編集・発行、一九七七年九月。

「幕末の社会変動と民衆意識―慶応二年武州世直し一揆の考察―」『歴史学研究』四五八号、近世村落史研究会共著、青木書店、一九七八年七月。

「寛政の改革と化政時代」『日本史(5) 近世2』（有斐閣新書）、大石慎三郎編、有斐閣、一九七八年九月。

「所沢における「世直し」世界の形成―慶応二年武州世直し一揆の一齣―」『所沢市史研究』三号、所沢市史編さん室発行、一九七九年三月。

「世直し」世界の形成―慶応二年武州世直し一揆の考察―『近世国家の解体と近代』、津田秀夫編、塙書房、一九七九

年十一月。

「代官大場弥十郎の農政」『多摩のあゆみ』一八号、多摩文化資料室編、多摩中央信用金庫発行、一九八〇年二月。

「幕藩制の変質と代官農政——彦根藩世田谷領村落の荒廢と再興政策——」『日本社会史研究』（芳賀幸四郎先生古稀記念、笠間書院、一九八〇年五月）。

「享保期農政と畑作農村——武蔵野新田成立期の構造——」『関東近世史研究』一二号、関東近世史研究会編集・発行、一九八〇年一〇月。

「幕藩制崩壊期における都市と農村——江戸周辺農村の構造と動向——」『史潮』新八号、歴史学会編、弘文堂、一九八〇年十一月。

「御門訴」研究の視点」『多摩のあゆみ』二六号、一九八二年二月。

「文政改革と関東農村——文久三年の対外危機と組合村の武装編成——」『歴史手帖』一〇巻六号、名著出版、一九八二年六月。

「近世後期信州佐久郡五郎兵衛新田村の構造——寛政——文政期の宗門人別帳の分析——」『水と村の歴史』（信州農村開発史研究所紀要、創刊号、信州農村開発史研究所発行、一九八三年一月）。

「文政改革と関東農村——幕末期の対外危機と組合村の武装編成——」『論集関東近世史研究』（再録、村上直編、名著出版、一九八四年十二月）。

「開港と経済変動——生糸売込商吉村屋幸兵衛の検討——」『開国』（講座日本近世史7）、青木美智男・他編、有斐閣、一九八五年五月。

「幕末維新时期村落女性のライフ・コースの研究——江戸周辺、武州荏原郡太子堂村の事例——」（一）（二）、『史料館研究紀要』一六号・一七号、国文学研究資料館史料館編集・発行、一九八四年九月・一九八五年九月。

「宗門帳にみる近世女性のライフ・サイクル―武州荏原郡太子堂村の事例―」「歴史評論」四三一号、歴史科学協議会編集、校倉書房、一九八六年三月。

「近世宿場女性史研究―北国往還信州下戸倉宿の『飯盛女』―」「日本地域史研究」、村上直先生還暦記念出版の会編集、文献出版、一九八六年一〇月。

「世直し」とは何か―「武州世直し一揆」の検討から―「多摩のあゆみ」四五号、一九八六年二月。

「伊奈備前」『講座日本技術の社会史 別巻1・人物編近世』、山口啓二・他編、日本評論社、一九八六年二月。

「開港と多摩の経済変動―多摩郡関前新田名主忠左衛門の『建言』の紹介―」（講演記録）、「田無のあゆみ」Ⅱ、田無市立芝久保公民館編集・発行、一九八七年三月。

「幕末の民衆の動向―慶応二年武州世直し一揆―」（講演記録）、「田無のあゆみ」Ⅱ、一九八七年三月。

「明治維新と民衆の動向―品川県御門訴事件―」（講演記録）、「田無のあゆみ」Ⅱ、一九八七年三月。

「草莽の志士と郷学運動―斎藤寛斎と太子堂村郷学所―」「近世国家と明治維新」、津田秀夫編、三省堂、一九八九年八月。

「文政の時代」『古文書が語る日本史7 江戸後期』、林英夫編、筑摩書房、一九八九年一〇月。

「〔近世史料論1〕『御用留』の性格と内容―武州荏原郡上野毛村『御用留』の検討―」（一）～（八）、「史料館研究紀要」

一九号、二二号～二七号、一九八九年三月、一九九〇年三月～一九九六年三月。

「斎藤寛斎」「日本歴史」五〇〇号（記念特集・日本史上の人物と史料）、日本歴史学会編集、吉川弘文館、一九九〇年一月。

「〔御門訴〕の展開過程―明治初年品川県社会騒動―」「多摩のあゆみ」五八号、一九九〇年二月。

「村人の一生」「日本村落史講座第七卷 生活Ⅱ近世」、木村礎・他編、雄山閣、一九九〇年五月。

「家族の教育」「叢書〈産む・育てる・教える〉」2 家族―自立と転生―、中内敏夫・他編、藤原書店、一九九一年五月。

「旗本の地方知行の動向と小農村落の確立」「旗本と知行制」（論集幕藩体制史第五卷）（再録）、藤野保編、雄山閣、一九

九五年一月。

「近世史料論―史料整理と目録編成―」（講演記録）、「史学論集」二五号、駒沢大学大学院史学会編集・発行、一九九五年四月。

「小泉次大夫と用水開発」「幕藩制支配と地域動向」、文献出版、一九九六年一〇月。

「近世私文書の世界―文字社会の展開―」（講演記録）、「信濃」四九卷二号、一九九七年二月。

「近世史料論2」「金銭出入覚書帳」の性格と内容―武州荏原郡奥沢村原家文書の事例―」（一）（二）、「史料館研究紀要」二八号・二九号、一九九七年三月・一九九八年二月。

「幕末維新时期庶民の識字力の展開―寺子屋・郷学・学制発布―」（講演記録）、「詩人杉浦梅潭とその時代」、国文学研究資料館編、臨川書店、一九九八年二月。

四、その他

（一）研究発表要旨・解説論文等

「天保改革と江戸近郊農村」（研究発表要旨）、「東京の歴史」研究会「会報」一号、「東京の歴史」研究会編集・発行、一九六〇年四月。

「武蔵国における初期徳川検地と村落構造」（研究発表要旨）、「東京の歴史」研究会「会報」二号、一九六一年十一月。

「徳川氏の関東入国と中世土豪武士団の解体過程―世田谷吉良家臣団を中心に―」（研究発表要旨）、「東京の歴史」研究会
「会報」三号、一九六三年六月。

「元禄期における旗本の地方知行の変容」、関東近世史研究会会報「二六―一九世紀研究」五号、一九六七年六月。

「明治初年東京周辺における農民闘争―武蔵野新田における「門訴」一揆―」（研究発表要旨）、関東近世史研究会会報

「二六―一九世紀研究」六号、一九六八年一〇月。

「農村の階層分化はどのように進んだか」「日本歴史の視点」第三卷近世、児玉幸多・他編、日本書籍、一九七三年八月。

「百姓一揆はどのような発展を示したか」「日本歴史の視点」第三卷近世、一九七三年八月。

「幕末維新の政治過程に民衆はどの程度参加したか」「日本歴史の視点」第三卷近世、一九七三年八月。

「幕末をどうとらえるか―「世直し状況」論の視点―」「リサーチ歴史」二九号、清水書院、一九七四年三月。

「封建社会の確立と近世文化の形成」「日本史 新訂版 指導と研究」、清水書院、一九七四年四月。

「世直し」覚書」「近世史叢」創刊号、近世村落史研究会編集・発行、一九七五年二月。

「相給村落の新開地をめぐる領主間抗争」「神奈川県史 資料編八 近世（5上）」附録「神奈川県史だより」、神奈川県、

一九七六年三月。

「世直し」一揆「像の虚実」「岩波講座日本歴史13巻」附録「月報」22号、岩波書店、一九七七年二月。

「大名と一揆―「世直し」一揆と領主権力―」「江戸三百諸侯列伝」（別冊歴史読本伝記シリーズ4）、百年社編集、新人物

往来社発売、一九七七年六月。

「世直し」一揆考―打ちこわしと施米・施金と焼払い―」「編年百姓一揆史料集成」第一卷「編集のしおり」1、三一書

房、一九七九年二月。

「武州世直し一揆」と信濃国の動向」『新編埼玉県史 資料編Ⅱ 近世2』附録、埼玉県民部県史編さん室編集・発行、一九八一年一月。

「天保という時代―江戸周辺―農村の様相から―」『歴史への招待』15、NHK編、日本放送出版協会発行、一九八一年八月。

「等々力」の歴史的概観」『等々力―世田谷区民俗調査第四次報告―』、世田谷区民俗調査団編集、世田谷区教育委員会発行、一九八四年一〇月。

「奥沢」の歴史的概観」『奥沢―世田谷区民俗調査報告第五次報告―』、一九八五年三月。

「馬引沢」の歴史的概観」『馬引沢―世田谷区民俗調査第六次報告―』、一九八六年三月。

「下北沢」の歴史的概観」『下北沢―世田谷区民俗調査第八次報告―』、一九八八年三月。

「武蔵野新田開発」の一樣相」『古文書通信』五号、NHK学園編集・発行、一九九〇年五月。

「武蔵野新田開発人の動向―享保期武蔵国多摩郡野中新田の事例―」『古文書通信』九号、一九九一年五月。

「開村以前の武蔵野」（武蔵野風土記第一回）『季刊武蔵野』一五号、武蔵野市編集・発行、一九九一年六月。

「江戸を生きた庶民の一生 その1―子どもから若ものへ―」『遠州』三〇三号、につかん書房編集、大有発行、一九九一年八月。

「江戸を生きた庶民の一生 その2―結婚と離婚―」『遠州』三〇四号、一九九一年九月。

「江戸を生きた庶民の一生 その3―老いと相続―」、『遠州』三〇五号、一九九一年一〇月。

「吉祥寺村の成立」（武蔵野風土記第二回）『季刊武蔵野』一六号、一九九一年一〇月。

「西窪村の成立」(武蔵野風土記第三回)『季刊武蔵野』一七号、一九九一年二月。

「若者組と幕府権力」『古文書通信』一二号、一九九二年二月。

「所沢村組合」『新編ところざわ史話』、所沢市役所企画部広報広聴課編集、所沢市発行、一九九二年三月。

「ぼっこしー」世直し一揆——『新編ところざわ史話』、一九九二年三月。

「開前村の成立」(武蔵野風土記第四回)『季刊武蔵野』一八号、一九九二年三月。

「境村の成立」(武蔵野風土記第五回)『季刊武蔵野』一九号、一九九二年六月。

「玉川上水と武蔵野の開発」『古文書通信』一四号、一九九二年八月。

「享保の新田開発」(武蔵野風土記第六回)『季刊武蔵野』二〇号、一九九二年九月。

「御門訴(一)」(武蔵野風土記第七回)『季刊武蔵野』二二号、一九九二年二月。

「御門訴(二)」(武蔵野風土記第八回(最終回))『季刊武蔵野』二二号、一九九三年三月。

「古文書からみた村人の一生」『古文書通信』一八号、一九九三年八月。

「大塩平八郎の乱」『日本歴史館』、大口勇次郎・他編、小学館発行、一九九三年二月。

「天保水滸伝」の世界」『日本歴史館』、一九九三年十二月。

「古文書の整理と保存」『古文書通信』二五号、一九九五年五月。

(二) 研究動向

「最近における地方史研究の動向——一九五九・六〇年の東京都——」『地方史研究』四七号、地方史研究協議会編、一九六

〇年一〇月。

「一九六七年度の歴史学界 回顧と展望 近世」(分担執筆)『史学雑誌』七七編五号、史学会編、一九六八年五月。

「戦後日本近世史研究の動向——中後期の政治史研究を中心として——」『信州史学』創刊号、信州大学教育学部歴史研究会編、一九七三年九月。

「一九八二年度歴史学研究会大会報告批判」(近世史部会)『歴史学研究』五一〇号、一九八二年十一月。

「『文政改革』研究史覚書」『所沢市史研究』八号、所沢市史編さん室発行、一九八四年三月。

(三) 書評

「『神奈川県史』資料編七 近世(4)幕領2」『神奈川県史研究』二九号、神奈川県史編集委員会編、一九七五年九月。

「村上直・他編『日本近世史研究事典』」『週刊読書人』一八〇八号、一九八九年九月。

「川崎市史 通史編2 (近世)」『川崎市史研究』六号、川崎市史編さん委員会編集、川崎市公文書館発行、一九九五年三月。

「大口勇次郎著『女性のいる近世』」『社会経済史学』六二巻五号、社会経済史学会編集・発行、一九九七年一月。

(四) 自治体史

「世田谷区史料」一集、四集(共編著)、東京都世田谷区発行、一九五八年一月、一九六一年三月。

「新修世田谷区史」上・下巻(共編著)、東京都世田谷区発行、一九六二年一〇月。

「武蔵野市史 資料編」(共編著)、武蔵野市史編纂委員会、武蔵野市役所発行、一九六五年三月。

『武蔵野市史 続資料編二』（共編著）、武蔵野市史編纂委員会、武蔵野市役所発行、一九六八年三月。

『武蔵野市史』（共編著）、武蔵野市史編纂委員会、武蔵野市役所発行、一九七〇年三月。

『三鷹市史料集 御家人給知村落史料―武蔵国多摩郡牟礼村・高橋家文書―』一集―三集（共編著）、近世村落史研究會編、三鷹市史編纂委員会刊行、一九六九年三月・一九七〇年三月・一九七二年二月。

『世田谷区史料』五集―七集（共編著）、東京都世田谷区発行、一九七四年三月―一九七五年二月。

『せたがやの歴史』（共著）、東京都世田谷区発行、一九七六年九月。

『所沢市史 近世史料』Ⅰ・Ⅱ（共編著）、所沢市史編さん委員会、所沢市発行、一九七九年八月・一九八三年三月。

『所沢市史』上・下（共編著）、所沢市史編さん委員会、所沢市発行、一九九一年九月・一九九二年二月。

『世田谷区史料叢書』一卷―三卷（共編著）、世田谷区立郷土資料館編集、世田谷区教育委員会発行、一九八五年三月―一九九八年三月。

『玉川上水をあるく』（共著）、武蔵野市文化財保護委員会編集、武蔵野市教育委員会発行、一九八八年三月。

『小泉次大夫用水史料』（共編著）、小泉次大夫事績調査団編集、東京都世田谷区教育委員会発行、一九八八年三月。

『国立市史』中巻（共著）、国立市史編さん委員会編集、国立市発行、一九八九年五月。

『武蔵野市史 続資料編五』（井口家文書二）（解説）執筆）武蔵野市編集・発行、一九八九年三月。

『武蔵野の民具と文書』（監修・共編著）、東京都武蔵野市教育委員会編集・発行、一九九二年三月。

『世田谷区教育史 資料編』一卷―六巻（監修・共編著）、世田谷区教育委員会編集・発行、一九八八年三月―一九九三年三月。

『世田谷区教育史 通史編・年表』（監修・共著）、世田谷区教育委員会編集・発行、一九九六年三月。

『里正日誌』 第九卷 (自 元治元年 至 慶応三年) (校訂・編集分担)、東大和市教育委員会発行、一九九四年三月。

『里正日誌』 第七卷 (自 安政元年 至 安政六年) (校訂・編集分担、東大和市教育委員会発行、一九九五年三月。

『里正日誌』 第十卷 (自 明治元年 至 明治二年) (校訂・編集分担)、東大和市教育委員会、一九九六年三月。

『里正日誌の世界』 (東大和市史料編?) (共編著)、東大和市史編さん委員会編集、東大和市発行、一九九七年三月。

『里から町へ——一〇〇人が語るせたがや女性史』 (共編)、世田谷女性史編纂委員会編、ドメス出版、一九九八年三月。

(五) 古文書目録

『旧荏原郡太子堂村名主森家文書目録』 (共編著)、東京都世田谷区教育委員会編集・発行、一九八一年二月。

『旧荏原郡上野毛村名主田中家文書目録』 (共編著)、東京都世田谷区教育委員会編集・発行、一九八二年三月。

『旧多摩郡鎌田村名主橋本家文書目録』 (共編著)、東京都世田谷区教育委員会編集・発行、一九八三年三月。

『世田谷諸家文書目録』 (共編著)、東京都世田谷区教育委員会編集・発行、一九八四年三月。

『五郎兵衛新田古文書目録』 一集、四集 (共編著)、長野県北佐久郡浅科村教育委員会編集・発行、一九八一年三月、

一九八三年三月。

『信濃国佐久郡御影新田村柏木家文書目録』 (史料館所蔵史料目録第四十五集) (編著)、国文学研究資料館史料館編集・発

行、一九八七年三月。

『信濃国松代真田家文書目録(その六)』 (史料館所蔵史料目録第五十九集) (共編著)、国文学研究資料館史料館編集・発行、

一九九三年三月。

『信濃国埴科郡下戸倉村名主坂井家文書目録』 (編著)、坂井修一・坂井永一発行、吉川弘文館販売、一九九五年三月。

『武蔵国多摩郡後ヶ谷村杉本家文書目録』（史料館所蔵史料目録第六十五集）（編著）、国文学研究資料館史料館編集・発行、一九九七年三月。

（六）史料館活動報告等

「歴史資料保存利用機関連絡協議会（『史料協』）関東部会設立準備に参加して」「史料館報」四一号、国文学研究資料館史料館編集・発行、一九八四年九月。

「史料所在調査報告 信濃国埴科郡下戸倉村坂井家文書」「史料館報」四二号・四四号、一九八五年三月・一九八六年三月。

「史料館叢書9 大塩平八郎一件書留」の刊行「史料館報」四六号、一九八七年三月。

「新田開発人の特権の消長―『所蔵史料目録』第四十五集の刊行によせて―」「史料館報」四七号、一九八七年九月。

「移転」問題と「史料館」の現況「史料館報」五〇号、一九八九年三月。

「史料所在調査報告 信濃国軽井沢宿本陣・問屋佐藤家文書」「史料館報」五二号、一九九〇年三月。

「史料館の四十年と今後の課題」「史料館報」五五号、一九九一年九月。

「アジア・オセアニア地域におけるアーキビスト養成国際シンポジウム」参加記、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会「会報」二四号、一九九二年三月。

「大名家文書に存在する村方騒動文書―『真田家文書目録』（その六）の刊行によせて―」「史料館報」五八号、一九九三年三月。

「史料館の歩みと今後の課題―史料館長のあり方によせて―」「史料館報」五九号、一九九三年五月。

「国文学研究資料館史料館の現状—その事業と研究—」『日本歴史学協会年報』一〇号、日本歴史学協会編集・発行、一九九五年三月。

「国文学研究資料館史料館の活動—平成七年度—」『日本歴史学協会年報』一一号、一九九六年三月。

「文字社会のひろがり」と意識変化」『史料館収蔵史料展パンフレット』、史料館編集・発行、一九九六年五月。

「近世文字社会のひろがり—史料館収蔵史料展—」（平成八年度春期特別展示・講演会）『史料館報』六五号、一九九六年九月。

「国文学研究資料館史料館の活動—平成八年度—」『日本歴史学協会年報』一二号、一九九七年三月。

「史料叢書」の刊行開始によせて—第一卷「近世の村・家・人」の概要紹介—」『史料館報』六七号、一九九七年九月。

「湖底に沈んだ村の文書目録—「武蔵国多摩郡後ヶ谷村杉本家文書目録」の刊行—」『史料館報』六七号、一九九七年九月。

「国立史料館」の現状と課題—史料保存機関の一事例—」『史料の調査と保存』（木村礎著作集X解説）、一九九七年九月。

（七）寄稿文

「世田谷区における区史編さんと文化財行政」『史誌』八号（大田区史、大田区史編纂室編集・発行、一九七七年二月）。

「古文書の物語るものは何か」「水と村の証言—五郎兵衛新田物語—」、信州農村開発史研究所編、信濃毎日新聞社発行、一九八〇年六月。

「世田谷区教育史」編さんに携わって」「藤沢市教育史研究」四号、藤沢市教育史編集委員会編、藤沢市教育文化センター発行、一九九五年三月。

「地方史研究と『多摩のあゆみ』」「多摩のあゆみ」八一号、たましん歴史・美術館編集、たましん地域文化財団発行、一九九五年十一月。

「千葉県の文書館」の創刊によせて「千葉県の文書館」創刊号、千葉県文書館編集・発行、一九九六年三月。
「史料編さん刊行の二、三の事例―史料編さんに寄せて―」「史料編さんだより」3、埼玉県立文書館編集・発行、一九九七年一月。

(八) 古文書テキスト等

「古文書を読む 基礎コース・テキスト」(監修・共著)、三省堂編、日本放送協会学園発行、一九八九年四月。

「古文書を読む 応用コース・参考文書集」(監修・共著)、三省堂編、日本放送協会学園発行、一九九〇年四月。

「古文書を読む 解説実践コース・解説ノート」一冊～七冊(監修・共著)、三省堂編、日本放送協会学園発行、一九九二年四月～一九九八年三月。

「古文書への誘い 北条氏楽市提書」「木の国ねんりん」五号、第一法規出版制作、和歌山県いきいき長寿社会推進センター発行、一九九一年三月。

「古文書への誘い 天正十八年四月豊臣秀吉禁制」「木の国ねんりん」六号、一九九一年七月。

「古文書への誘い 天保二年十一月隠居地取り極め覚」「木の国ねんりん」七号、一九九一年一〇月。

「古文書への誘い 離縁状」「木の国ねんりん」八号、一九九二年一月。

「古文書への誘い 寛文二年九月十四日西久保城山町百姓替地願」「木の国ねんりん」九号、一九九二年四月。

「古文書への誘い 寛文二年十一月二十七日新田開発資金借用証文」「木の国ねんりん」一〇号、一九九二年七月。

「古文書への誘い 嘉永六年二月婚姻につき人別送り状」『木の国ねりん』二二号、一九九三年一月。

(九) 執筆した辞典・事典

【新版 郷土史辞典】大塚史学会編、朝倉書店、一九六九年二月。

【コンサイス 日本人名事典】津田秀夫・他編、三省堂、一九七六年三月。

【角川地名大辞典13 東京都】同編集委員会、角川書店発行、一九七八年一〇月。

【国史大辞典】同編集委員会、吉川弘文館発行、一九八〇年七月。

【平凡社 大百科事典】下中邦彦編、平凡社、一九八四年一月。

【江戸東京事典】小木新造・他編、三省堂、一九八七年二月。

【藩史大事典】第二巻、木村礎・他編、雄山閣発行、一九八九年二月。

【朝日 現代日本人物事典】小泉欽司編、朝日新聞社発行、一九九〇年十二月。

【日本史大事典】下中弘編、平凡社発行、一九九三年二月。

【朝日 日本歴史人物事典】小泉欽司編、朝日新聞社、一九九四年一月。

【大辞林】(第二版) 松村明編、三省堂、一九九五年一月。

【事典 家族】比較家族史学会編、弘文堂発行、一九九六年二月。

【地方史事典】地方史研究協議会編、弘文堂発行、一九九七年四月。

「伊藤好一」私の歴史研究―地方史研究とともに歩んで（上・中・下）（聞き手 高島緑雄・森安彦）『歴史評論』四五一号・四五二号・四五三号、一九八七年一月・同年二月・一九八八年一月。

「戦後地方史のうねり―自治体史の今後を見ずえて―」（永原慶二・西垣晴次・所理喜夫・森安彦・北原進）、大田区史研究『史誌』三八号、東京都大田区発行、一九九三年八月。

「戦後五〇年史料の公開と保存」（笹山晴生・狩野久・永原慶二・木村礎・森安彦・伊藤隆・有馬学・瀬野清一郎・山田邦明）『日本歴史』五七七号、吉川弘文館発行、一九九六年六月。

（一）古文書エッセイ

「屋久島の春」『古文書通信』創刊号、NHK学園編集・発行、一九八九年五月。

「ある古文書との出会い」『古文書通信』二号、一九八九年八月。

「韓国の旅から」『古文書通信』三号、一九八九年十一月。

「古文書講座この一年」『古文書通信』四号、一九九〇年二月。

「古文書学習への期待」『古文書通信』五号、一九九〇年五月。

「古文書の面白さ」『古文書通信』六号、一九九〇年八月。

「古文書を訪ねて―離縁状―」「ぶっくれつと」八九号、三省堂編集・発行、一九九〇年十一月。

「古文書」講座のテレビ放送『古文書通信』八号、一九九一年二月。

「離縁状」からみた女性史『古文書通信』九号、一九九一年五月。

「江戸時代の村の子ども」『古文書通信』一〇号、一九九一年八月。

「古文書を訪ねて―北条氏楽市掟書―」【ぶつくれつと】九五号、一九九一年一月。

「『老い』の世界」【古文書通信】一一号、一九九一年一月。

「古文書を訪ねて―豊臣秀吉禁制―」【ぶつくれつと】九六号、一九九二年一月。

「晩秋の津山市」【古文書通信】一二号、一九九二年二月。

「地域文書館の役割」【システム】五号（文化の森通信）、文化の森総合公園・徳島県21世紀館内システム編集部編集・発行、

一九九二年四月。

「長崎の旅」【古文書通信】一三号、一九九二年五月。

「庶民史の宝庫」【古文書通信】一四号、一九九二年八月。

「名主の武士身分化」【古文書通信】一五号、一九九二年一月。

「年貢と税金」【古文書通信】一六号、一九九三年二月。

「文書館・資料館の活用を」【古文書通信】二〇号、一九九四年二月。

「私の古文書こと始め」【古文書通信】二一号、一九九四年五月。

「続・私の古文書こと始め」【古文書通信】二二号、一九九四年八月。

「古文書がもつ魅力」【古文書通信】二三号、一九九四年一月。

「歳の市―世田谷のボロ市―」【俳句春秋】五九号、俳句友の会編集、NHK学園発行、一九九五年一月。

「代官大場弥十郎のこと」【古文書通信】二四号、一九九五年二月。

「一九九五年の天災と人災」【古文書通信】二五号、一九九五年五月。

「断裁された宗門帳の復元」【古文書通信】二六号、一九九五年八月。

「戦後五十年、私の原点―学童集団疎開―」『古文書通信』二七号、一九九五年一月。

「海外にある日本の近世文書」『古文書通信』二八号、一九九六年二月。

「戊辰内乱と村の出来事」『古文書通信』二九号、一九九六年五月。

「江戸時代の村の情報公開」『古文書通信』三〇号、一九九六年八月。

「江戸時代の村の図書館」『古文書通信』三一号、一九九六年十一月。

「歴史と私」『歴史手帖』二五巻一号、名著出版、一九九七年一月。

「火札の筆跡鑑定」『古文書通信』三二号、一九九七年二月。

「史料叢書と史料目録の刊行」『古文書通信』三三号、一九九七年五月。

「ドイツに存在する日本史料の調査」『古文書通信』三四号、一九九七年八月。

「史料の保存と利用」『古文書通信』三五号、一九九七年十一月。

「里正」という言葉」『古文書通信』三六号、一九九八年二月。

(一二) 恩師を偲ぶ

「学者の真骨頂萩原先生」『萩原龍夫』萩原龍夫先生追悼会編・発行、一九八六年六月。

「北島先生との出逢い」『北島正元先生追悼集』刊行会発行、一九八六年十二月。

「津田秀夫先生を偲ぶ」『関東近世史研究』三四号、一九九三年九月。

「古島敏雄先生と国立史料館」『わたしたちに刻まれた歴史―追想の古島敏雄・百合子先生』古島敏雄・百合子御夫妻追

悼文集刊行会企画・発行、一九九六年八月。

あとがき

史料館長森安彦教授は、本年三月をもって退任される。本号は森館長のもとでの最後の「史料館研究紀要」となるので、略歴と主要著作目録を掲載した。森先生は、略歴にも明らかなとおり、史料館在職満十四年になられる。この間、史料館にとって実に転機というか、多難の時代というべきか、とくに史料館に赴任された頃は、その前々年の一九八二年に、行政管理庁が歴史民俗博物館との合併を示唆した行政勧告を行ったことから、館内もこの問題でピリピリしていた頃であつたと述懐されておられる。

しかし、信州大学から史料館に移られたのも、ひたすら史料に接し、研究に没入したいとの願いからであつたようで、主要著作目録に見るように、多彩多量な研究成果を挙げておられるのには、驚嘆するばかりである。これらからも多方面のご活躍、また学界などへの影響を見

て取ることができる。

昨秋の一日、いまでもつとも印象に残る史料館での思い出はなにかと伺ったところ、「四十周年祝賀会の開催」（一九九一年）、「史料館収蔵史料総覧」の刊行」「特別展「近世文字社会のひろがり」の開催」（ともに一九九六年）であつたと言っておられた。「総覧」と「特別展」は、ついこの間のことであるが、「四十周年」は、森先生十四年の在職の半ばの行事であつた。その頃には史料館のみならず歴史学界、文書館界を当惑させた「行動問題」も一息つき、史料館が新しい方向を模索していた時期でもあつた。また、史料館創設期の館員が停年でつぎつぎと去られた頃でもあり、世代交代を象徴する、ひとつの分水嶺でもあつたようだ。祝賀会の開催はご来席の方、旧職員、現職員が一体感を持つことができてたいへんな盛り上がりであつたと、これも述懐のひとつとしてお聞きた。

さらには「近世史料取扱講習会」を拡大し模様替えした「史料管理学研修会」も軌道に乗ってきた時期でもあ

った。史料館の今後の歩みを確実なものにするため、館のかじ取りが、ぜひとも必要であつた。一九九三年には、これまで実質的に館長の職務を担つてこられた森先生が、空席であつた史料館長に任ぜられた。これは、国文学研究資料館全体にとつても必要であつたし、史料館にとつても喜ばしいことであつたのは、いうまでもない。

森先生は、館長としてほぼ五年間勤められわけであるが、実質的にはそれ以上の期間、館長同然の職務を果たされてきた。この五年間は、名実を備えいつそう多忙にして重大な職責を、史料館と史料保存のために果たされてきたことになる。私もちょうどこの五年間、ご一緒に仕事をさせていただき、ご指導を仰いできたのであるが、

森先生の精力的な館務と研究のエネルギーには圧倒されてきた。本誌に掲げた略歴と主要著作目録は森先生ご自身の手になるものであるが、そのなかに先生の史料と歴史学への傾注と、また愛情がたちこめているのが感じとられるのではなからうか。

さて、史料館ご退任後は、再び大学に籍を置かれると伺っている。先生には新たな研究の機会が備えられ、遠からぬ日にこの著作目録が倍加されることになるのである。ご健康でますますのご活躍なされることを願つてやまない。ながい間の史料館でのお働きに感謝を記して、本号のあとがきとしたい。

（鈴江英一）

